

# 音楽科「鑑賞」の授業における効果的なアプローチ等に関する考察 —教職大学院での学びと、いくつかの視点から—

松田 京也  
教科領域コース

## 1. はじめに

中学校学習指導要領には「表現」「鑑賞」の2つの領域が示されているだけでなく、「共通事項」などを手掛かりとしながら共に関連ある授業を行うことが求められている。ただ実際の現場では様々な業務の中、限られた時間で教材研究を行う必要があり、さらに音楽科の授業においては学校行事の準備をお願いされることも多く、「鑑賞」の授業を効果的に実践することが難しい環境もあると考えられる。そこで、ひとつの提案として松田・藤田（2023）では、対話による授業展開について、美術的な「対話型鑑賞」の視点なども取り入れながら、汎用的に鑑賞の授業で取り入れられる型を考え、教科領域実習Ⅱではこの考えを踏まえ実践し検証した。もちろん限られた期間で本質的に検証を行うことは難しく、あくまでもその場での生徒の反応や記述から思考について感覚的に読み取ることが中心で、生徒の変化に関しての数値化や複数の実践の比較には至っていない。また「表現」「鑑賞」は互いに関連した授業が求められていることは先述した通りであり、積み重ねの学習も必要だ。そのため、本格的な検証は現場に出てからということになるだろう。本稿では、実践を踏まえた考察に加え、改めて複数の視点から「鑑賞」の授業における効果的なアプローチ等について先行研究などをもとに考え、実践研究報告としたい。

## 2. 改めて、対話による授業展開に関する筆者の一提案

まず、鑑賞の授業における対話的な学びについて、中学校学習指導要領では「鑑賞の指導においては、音楽を自分なりに評価しながら、そのよさや美しさを味わって聴く力を育てることが大切であり（中略）生徒一人一人が音楽を自分なりに評価する活動と、評価した内容を他者に言葉で説明したり、他者と共に批評したりする活動を取り入れることによって、鑑賞の学習の充実を図る（後略）」とある。そこで松田・藤田（2023）では、歴史的な事柄や知識が先行ではなく、率直に見て気づき、感じたことを対話しながら交流していくというプロセスが大切にされている美術における対話型鑑賞の考えを音楽における鑑賞においても取れ入れようとした。自由で自分なりの発想をもととした対話を通して、生徒が関心をもって主体的に取り組んだり、鑑賞に必要な能力を身に付けられる（トレーニングとなる）ことなどを目指し、一提案として次のような型を示した。（右の図：松田・藤田より抜粋）

活動の流れ	配慮すること等
○音楽を聴いたあとにする活動を確認する。	・聴いた後にグループで交流する際の方法などを確認しておく。（気づいたこと、思ったこと、感じたこと、なぜそう思ったかなどの項目を確認するとともに、グループごとに手元に視覚的に分かるようにしておく。また、タブレット端末等に音源を配付しておく。 ・注目する視点の例を示しておく。（リズム・強弱など、音楽を形づくっている要素を活用する。ただし、ここではあくまでも補助的に、何もわからないを防ぐものとして。）
○音楽を聴く	・全体で教室のスピーカーを使って聴く。
○グループで交流する。	・事前の確認をもとに、すぐに交流する。
○全体で交流する。	・各グループで出た発言を全体で交流する。この際、教師はファシリテーターの役割を意識し、知覚したことと感受したことなどを整理し、根拠をもたせることを特に意識する。 ※この後の活動は授業ごとに考慮しつなげていく。

（筆者作成）

### 3. 実践の報告と、そこから考えられること

#### ★事例1. 中学校1年生「日本の民謡」

日本の民謡を扱ったこの授業では、「対話型鑑賞」の考えをもとに、北海道民謡『ソーラン節』を聴いて「知覚」「感受」したことを自由に書き、交流するという活動を取り入れた。この曲の場合は、小学校での学習などで耳にしたことがある生徒も多いが、「知識先行」ではなく率直に聴くという意図をもった。ワークシートを見ると、多様で自由な記述、発言（例：古い気がする、しぶい、元気、かけ声で息を合わせている、男気がある、クセになる、一定のテンポやリズム、三味線を使っている、強め など）が見られた。また、この記述をもととした対話では、活発に話す様子が見られ、最初の記述以外にも話が膨らんでいく様子も見られた。ここからの推測として、聴いて率直に考えた場合「知覚」「感受」の一方を短い言葉で表すことが多いが、学級全体で見ればその記述は多種多様で、他者との対話を行うことによりそれらが繋がり、広がり、深まるということは必然として起こりうる。自分の考えを他者に伝えようと試行錯誤する中で考えを整理したり言語化する、他者の考えに触れる事で多様な考えを知る、さらには互いの考えを共有し考えを広げたり深めたりする、といった「対話」の活動の積み重ねが経験値や知識量につながるだけでなく、自分たちで学び合う姿勢をもつことにも繋がり得る。

#### ★事例2. 高等学校1年生「動物の謝肉祭」

組曲『動物の謝肉祭』（C.サントス作曲）の14の各曲を聴き、その各曲のタイトルを伏せた状態で予想する活動を取り入れた。高校生ということで知識量や経験値があり、一人ひとりの音楽に対する意欲も感じられたが、グループ活動では活発に意見が飛び交うというよりは、まだ少し遠慮ぎみに参加しているようにも見て取れた。この授業では、①自分なりに考える②他者と対話するという2点が非常にスムーズかつ自然な流れで行われるというメリットがあった。まず①の段階では、曲名を14の選択肢から予想し選ぶため、「全く分からない」「空欄」とはなりにくい。そして、選択肢から選ぶ際には何らかの理由や根拠があるはずで、生徒は音楽から何かを聴き取ったり、感じ取ろうとするだろう。その「知覚」「感受」をスムーズに言葉にできる生徒は、聴き、予想しながらワークシートに積極的に記入できるが、自分の中で整理したり言葉で表すことを苦手とする生徒もいるはずだ。そこで今回は、気になった「音楽の要素」にマルを付けることは必須とし、この時点での記述は任意とした。②で他者と対話する際には、要素につけたマルなどが「自分の考え」を伝える手掛かりとなり、対話のきっかけともなること、自信をもって参加できることを意図した。また、②の対話の活動では、①の活動で大半の生徒が迷ったり悩んだりと色々考えているので、他者の考えが自然と気になる。そのため活発な対話に繋がりやすかったと考えられ、自然と「対話を活発にできる空気感の醸成」に繋がる可能性を感じられた。また、まずはマルをつけて「音楽の要素」に触れることで構えずに「要素」について考え、その後の活動で少しずつ深めていくという形にした。

★このように「対話型鑑賞」の考えを取り入れることで、鑑賞の「きっかけ」「つかみ」として「自分の感性で、自分ごととして聴く」「なぜだろうと思う」ことに始まり、対話を通して「自分の考えを整理する」「他者の考えから新たな視点を得る、広がる」と、主体的、対話的かつ協働的に学ぶことで、鑑賞に必要な能力を育み、深い学びにも繋がると感じられた。なお、「型」を継続的に用いて鑑賞の活動を定着させることの効果については、今後も検証が必要だ。

#### 4-1. 実践を経て、よりスムーズで生徒を引き付ける鑑賞活動を目指して

鑑賞の活動をよりスムーズかつ生徒を引き付けるものとするための一つの手段として、補助ツールを活用できないかと考えた。茨城県近代美術館のスクールプログラム、対話型アートツアーで用いられる「ART (アート) トランク」という鑑賞を手助けする補助ツールのひとつに、「ひらめきサイコロ」というものがある。出た目から鑑賞の対象とするものに応じた質問をし、鑑賞者に視点を与えてくれるものである。それに倣って考えた「鑑賞サイコロ」は、各面に音楽の要素を配置することで、対話の際に明示された要素に注目して会話をしたり、視覚的に色々な要素があることを捉えやすくするなど、流れをスムーズにするとともに、音楽の要素をしっかりと意識した学習活動につながると考える。ただし、率直に直観的なことを聞いた方がいい場面で理屈っぽくなりそうであれば使わないなど、意図をもって使いたいものである。なお、6面のサイコロの場合、面の数よりも「要素」が多いため、全ての要素を網羅するには2つ必要だ。



2つ目は、感情や感覚的なものを言語化するための補助ツール、「イメージカード」である。カードでイラストやオノマトペ、言葉などで感情や感覚を示したものを用意しておくことで、生徒が自分の思いに近いものを探したり、他者との対話に役立てる意図をもった。ただし、すべての感情や感覚が網羅されたものではないことをあらかじめ確認することや、あくまで補助やトレーニングとして使うことに留意する必要がある。場合によっては子どもたちが自らカードを作成したり、増やしたりすることも考えられる。活用の場面として、グループワークのほか、困り感のある生徒への支援としての活用も考えられる。

#### 4-2. 実践を経て、改めていくつかの視点を手掛かりとして考える

大橋 (2003) は、美術の鑑賞について、「美的な価値に触れる経験の個人的な喜びから、その価値観を相互に共感しあい、共有する喜びへとつなげていく上で、鑑賞の学習が果たす役割は小さくない (一部抜粋)」とした上で、「個人的な経験が、価値観や考え方の共有へと広がっていく中で鑑賞の能力は形成されていくのである (一部抜粋)」とも説明し、「教師が『鑑賞』を教える事は出来ない。出来るのは、子供たちの実態に応じて、適切な鑑賞活動の場と環境を設定し、用意してやることである。子供たちに多様で幅広く、また奥深い美的価値にいかに出合わせるのか、ということが鑑賞の学習指導における教師の役割であると言えよう (一部抜粋)」とした。

この「教えない」教師を目指したとき、「ファシリテーター」としての関わり方が考えられる。ファシリテーターは美術における対話型鑑賞でも重要な役割とされているだけでなく、「教育ファシ

リテーターになろう！」という書籍も出版されるなど、注目されている。中野（2012）は、「ファシリテーターは教えない。『先生』ではないし、上に立って命令する『指導者』でもない。その代わりにファシリテーターは、支援し、促進する。場をつくり、つなぎ、取り持つ。そそのかし、引き出し、待つ。共に在り、問いかけ、まとめる。（中略）『支援者』であり、新しい誕生を助ける『助産師』の役割を担うのだ」としているように、求められる役割は多く、一朝一夕で身につくものではない。しかし、このようなファシリテーションの考え方を取り入れることによって、単なる教え込みのような指導ではなく、多様な個性を尊重し一人ひとりが参加する授業の実現を目指すことが可能となる。これは音楽の授業のみならず求められているものではあるが、表現力や想像力、自由な発想を大いに必要とする芸術科目だからこそ、率先して実践すべきだと感じる。

## 5. まとめにかえて

今回は音楽科の授業における「鑑賞」領域について、より生徒が主体的・対話的で深い学び、かつ協働的な学びを実現することを目指し、松田・藤田（2023）の対話を取り入れた授業のうち「3-3. 鑑賞に必要な能力を育む方法の一考察」を中心として授業実践に取り入れ、その報告と考察をした。また、実践で得た視点をもとに新たな具体的方法を模索するとともに、「美術における鑑賞の考え方」や「ファシリテーションの視点」を改めて確認し、いくつかの視点からヒントを得ようとした。

芸術科目は、子どもたちが豊かな感性や想像力を育む上で必要不可欠なものであり、そこで培われるものは多様な学びの場ではもちろん、社会を生きていく中で大きな力となるはずだ。これからの未来を生きていく子どもたちには、私たちの想像にとどまらない力があると信じ、主体となって学んでいく姿を見守り育てることが、教員としてすべきこと、できることかもしれない。そういった上でも、今回、様々な先行研究等から得られたものは大きかったと感じている。

以上を実践研究報告とし、今後、本論による筆者自身の学びを手掛かりに、現場での教育活動においても研究を続けたい。また、本論が音楽科を中心とした様々な教育活動においても何らかの手掛かりとなれば幸いです。なお、ご協力を賜りました全ての皆様に心より感謝申し上げます。

## 6. 参考文献

- 1) 中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 音楽編（文部科学省）
- 2) 松田京也. 藤田文子.2023「中学校音楽科鑑賞の授業実践における教員の対話の展開に関する研究」『茨城大学全学教職センター研究報告』（2022）
- 3) 大橋功.2003「学校美術教育における「鑑賞教育」の課題についての一考察」『佛教大学教育学部学会紀要』
- 4) 平野智紀. 安齋勇樹. 山内祐平.2020「対話型鑑賞のファシリテーションにおける情報提供のあり方」『日本教育工学会論文誌』
- 5) 中野民夫.2012「ファシリテーション革命 参加型の場づくりの技法」（岩波書店）
- 6) 石川一喜. 小貫仁.2019「教育ファシリテーターになろう！ グローバルな学びをめざす参加型授業」（弘文堂）